



プライベートとビジネスの 二つの山を登り、旅する

貫田宗男さん

JECC 育ちらしく、海外デビューはヨーロッパアルプスで、北米にも早くから赴き、日本人を対象にした海外登山ツアーを 70 年代から仕事にして来た貫田宗男さん。コンサルタントとして、豊富な海外経験や登山を通して文化にも言及するその視点から、環境に対する日欧の違いなど何うことが出来ました。 (インタビューと文：張晶子)

◆どんな子ども時代をすごしましたか？

一生まれたのは山口県熊毛郡で、小学校に入る前に東京の世田谷・松原に移りました。

勉強もダメ、運動もダメ、身体がデカくて病気がちという、典型的ないじめられっ子でした。運動会など大嫌いで、本当に暗い時代でした。

中学校に入って、これではいけない、と卓球部に入りましたが、フットワーク練習について行けず一人ずれてしまい、数ヶ月でやめました。その後は電気部にはいりました。そのころ見かねた兄が冬の御岳山（奥多摩）に連れて行ってくれました。固形燃料でお茶を沸かすのが面白いと思ったのを覚えています。

◆山にのめり込んだのはいつ頃からですか？

一高校生になり、今度こそ強くなろうと選んだのが山岳部でした。中学にはない部活ですから、経験者もない訳です。我慢さえしていれば良いのだろうと思っていました。初めての大倉尾根（丹沢）で石を詰めたキスリングを背負い登ったところザック麻痺になり、1ヶ月くらい治りませんでした。親からも医者からも先輩からも「やめろコール」が上がりました。

夏合宿に行けなかった私を山に連れて行ってくれたのが、中学時代の理科の森次先生でした。北岳・間ノ岳・農鳥岳の白峰三山に行き、ここで火が着きました。

冬山は高校では禁止でしたが、1年生の冬、単独で丹沢主脈縦走をやりました。コッヘルも無く、ツェルトでしたが、充実感がありましたね。2年で部長になり、ボッカ力の無い私は、荷を軽く出来る岩登り指向になりつつありました。つづら岩や日和田山で岩登り訓練をして、そこで知り合った日本登攀クラブの方や社会人山岳会に入った同級生の話などにずいぶん感化されました。サブザックやツェルトだけで沢登りをしたり、

3年の冬にはも重い冬用テントは下に置いて、塩見岳登頂をしました。

山道具を担いで受験した信大には失敗し、翌1970年中央大学に入学すると同時にJECCに入りました。

◆初海外登山はどうでしたか？

—JECCでは当時のリーダー加藤滝男さんが作ったカリキュラムの全てに参加しました。

1年目の夏に屏風岩・鳳翔ルート、冬に大同心正面ルートを登りました。大蔵喜福さんは同期です。

1972年春にヨーロッパに行けと言うことになり、福原拓也さんとシャモにの岩場を経験しました。山学同志会やJMCCなど多くの日本人クライマーがいました。登ろうと思っていたマッターホルンは結局ヘルンリ尾根に逃げる羽目になり、ビバークして敗退でした。加藤滝男さんのアパートに宿泊し、秋に帰国しました。大学ではあまり授業もなかった時代です。

◆ガイドイングという仕事に入ったきっかけは？

—1974年に卒業するとニューヨークへ行きました。周りの山の友人が何人も亡くなったこともあり、山はやめたと思いました。その後シカゴに住んだのですが、市街地で発砲事件があり何人も人が亡くなり、この時、西の山岳地帯に行きたくなりました。山のギアを日本から送ってもらい、グレイハウンドバスに乗って山のある町へと向かいました。

ここで、カレッジに通い、根岸知さんとマッキンレーに登ったり、カナダでガイドのアルバイトをしたりしました。

この頃黒川さん（現アルパインツアー会長）とも知り合い、1976年夏に帰国して、黒川さんのプレイガイドトラベルの中にシエラブランカデスク（部門）を作ったのです。そこから、その後のアルパインツアーでの仕事につながった訳です。

1995年に後輩の古野さんと創った会社WECトレックは、世界探検コンサルタントの略で、ガイドツアーおよびコンサルタント、最近では衛星携帯電話のレンタルなどもやっています。

◆日本と外国の山の環境保護意識の違いを感じることはありますか？

—日本人は海外で現地の水を飲みたくないが由にペットボトルを多用します。ツアーの中には、ペットボトルサービスを唱うところもあるぐらいです。が、欧米人の意識では、水はヨード剤や電気を利用した紫外線殺菌などを利用して、現地の水を飲用することが

環境保護につながると考えられています。水を沸かして飲むことも、燃料を使うので極力抑えるべきと言います。

トイレの紙分別もそうですが、現地の環境を保全し、翌年もまた同じように使えるようにすることが持続可能な環境保護という訳です。

ポカラでは「P・B は敵だ！」という看板まであるくらいです。Co2 を削減することも視野に入れないと、山の環境は根本的には守れません。

環境意識の前に、登山に対する文化的意識が違います。ヨーロッパでは、登山は文化であると同時に観光産業の資源として意識されています。

- ◆最近では TV 番組でタレントを山に登らせるなど、山でビジネスを展開している面が表に押し出されていらっしゃるようですが、山にこだわり続けて来た山ヤとしての一面を大切に仕舞い込んでいることの裏返しという印象を受けました。そして山の環境に着いてシビアに考える緊張感も呼び起こさせて頂きました。ありがとうございました。